

基盤研究 (B)

社会学のディシプリン再生と デュルケーム



目次

● 本科研の概要	1
● 研究報告	3
● 本科研主催 国際シンポジウムの報告	7
● 活動報告	12
● 連載 玩味玩読デュルケームのことば 第8回	13
● 2018 年度成果報告	16
● 成果報告書 目次	17
● クロニクル	18

News Letter
vol.9
2019.3

9

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究 (B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

- **研究課題名** 社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として
- **研究代表者** 中島道男 (奈良女子大学)
- **研究分担者** 15 名 ● **研究協力者** 15 名
- **研究種目と期間** 基盤研究 (B) (15H03409)
平成 27 (2015) 年度～平成 30 (2018) 年度

● 研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、(A) 多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、(B) 学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、(C) 学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、(D) 我が国における社会学教育 (特に学説・理論教育) を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである (各班の 4 年間の研究概要は p.3 以降を参照)。

● 4つの班とメンバー

A班（起源解明チーム）

【研究分担者】太田健児 [班長]（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）

【研究協力者】赤羽悠（早稲田大学非常勤講師）／池田祥英（岐阜大学教育推進・学生支援機構准教授）／荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

B班（解釈史検討チーム）

【研究分担者】岡崎宏樹 [班長]（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学大学院人文科学系教授）[研究代表者]／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）

【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（東京工学院専門学校公務員科・航空学科専任教員）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター長）／村田賀依子（奈良女子大学非常勤講師）／吉本惣一（横浜国立大学非常勤講師）

C班（国際比較チーム）

【研究分担者】藤吉圭二 [班長]（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（千葉商科大学人間社会学部専任講師）／林大造（追手門学院大学社会学部准教授）

【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

D班（社会学教育チーム）

【研究分担者】白鳥義彦 [班長]（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学大学院人文科学系教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）

【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／梅村麦生（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学））／川本彩花（関西大学非常勤講師）

研究報告

◆全体

本科研は本年度3月末をもって終了します。4つの班の研究成果は以下に記しました。各研究メンバーが執筆した論文は、出版助成に応募のうえ刊行する予定です。成果報告書の目次は17頁をご覧ください。国際シンポジウムも、2017年度に東京と京都、2018年度には東京と奈良で、計4回開催しました。

また、教育的な媒体として、デュルケームの命題を紹介する『デュルケームの論点』を2019年度中にハーベスト社より出版する予定です。

なお4年間の詳しい歩みは本科研のニューズレターvol.1～8までをご覧ください。

◇A班（起源解明チーム）

<2018年度の研究報告>

当初のA班の目標「社会学的方法の規準成立とその周辺の解明」は最終年度に至り大きく前進した。待望の『社会学的方法の規準』の新訳(菊谷和宏訳)など各研究は順調に遂行され、2018年4月のデュルケーム研究会のミニシンポジウムでその成果の一端を報告した。これらを最終報告書論文に組み込むため、メンバー内での連絡や情報交換が必須であり、これを緊密に行うことをもって2018年度のA班研究会に代替することにした。

<4年間の研究報告>

「社会学的方法の規準成立とその周辺の解明」というA班のテーマ設定の下、この4年間A班研究会では『社会学的方法の規準』の翻訳作業状況の報告が逐次なされ、それを軸に各メンバーの研究をそれに重ね合わせ議論が展開できた点は非常に有意義であった。一つ一つの訳語を吟味しながらこれまでの邦訳を凌駕する日本語訳完成への訳者の努力に他のメンバーの研究が鼓舞されたといっても過言ではない。A班としては、デュルケームのテキストの内在的理解とコンテキストの理解、フランスにおけるデュルケーム研究の最前線の掌握、他分野(哲学、経済学)との接点の解明などを4年間継続して行ってきた。具体的にはテキスト理解の前提となるコンテキスト理解の問題として、フランス第三共和制期の独自性、特にライシテ(laïcité)との絡みからデュルケームの「社会」概念の出自を探った研究及び実証概念とエピステモロジーとの相関問題の研究(太田)、哲学分野との接点としてデュルケーム以前の思想家でフランスのニーチェともいえる G.M.ギュイヨー(Jean-Marie Guyau,1854-1888)あるいは A.フイエ(Alfred Fouillée,1838-1912)に焦点を当てた研究(北垣)、ベルクソンとデュルケームとの共通点の方に着目し、そこから逆照射して言語問題を考察した研究(小関)、タルド像の厳密な再構成から改めてデュルケームと比較した研究(池田)、デュルケームの政治哲学とそこから「実践」の問題を別扱した研究(赤羽)、フランス経済史からみたデュルケーム社会学研究(吉本)、以上の各研究が遂行された。ちなみに G.M.ギュイヨーの思想はライックな道德の構築の際、プロテスタントでありながら極限まで自由を尊重し、ライシテによる文教政策の推進者であった F.ビュイツソン(Ferdinand Buisson,1841-1932)に大きな影響を

研究報告

与えていたことが最近判明した。またベルクソン研究、哲学研究の立場から、デュルケーム社会学研究のあり方に対して、その結果としての生産物(社会学理論)に焦点を当てる研究以外に、その結果を生産する手前にあるデュルケームの発想や仕掛けの方を研究する重要性が問題提起された点も付記しておきたい。

◇B班（解釈史検討チーム）

<2018 年度の研究報告>

日本と欧米の学説研究の差異を検討し、4年間の研究を総括しつつ、各メンバーがディシプリンの変容過程に関する研究成果を報告書にまとめる作業に取り組んだ。中島道男が『丸山眞男——課題としての「近代」』を発表した。また、溝口大助が論文「沸騰、贖罪、死——デュルケーム学派宗教社会学における『聖なるもの』」を発表。国際シンポジウム「メディアと公共空間——メディアは誰のものか」(2/27: 日仏会館)では、金瑛が『『ポスト真実』の時代における『記憶』と『記録』の関係』と題する報告をおこなった。

<4年間の研究報告>

2015年度と2016年度は、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。重点を置いたのは、デュルケーム学派の継承の過程のなかで、社会学と隣接分野がどのように分節化されてきたのかを明らかにすること、〈社会の生成〉の理論化に着目してデュルケーム学派の仕事を読み直すこと、批判的継承の中で失われたものや非明示的に継承されたものに着目し、後代の研究をとらえかえすことである。この作業を通じ社会学の固有性を次のように命題化した。(1)「社会学は非合理的なものと合理的なものの関係を探求する」、(2)「社会学は抽象的な人間理解からはこぼれ落ちる人間や現象の具体性・具象性に注目する」、(3)「社会学は理解不可能に見える他者の理解を志向する」。論文としては中島道男「デュルケームの『国家 - 中間集団 - 個人』プロブレマティーク」(2016)などが発表された。

2017年度は研究成果の発信に力を入れた。本科研主催の国際シンポジウムでは、岡崎宏樹が「非合理性と流動性——社会学の境界で考える」(9/18: 日仏会館)、江頭大蔵が「個人と社会の相互浸透性と異質性」(9/21: キャンパスプラザ京都)を報告した。班長が企画した日仏社会学大会シンポジウム(10/28: 一橋大学)「マルセル・モースと現代」では、古市太郎が『『制度の狭間』で考える——MAUSSの『贈与論』解釈を通じて』を報告した(次年度に論文として発表)。また、三上剛史が『『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話』(2017)に続き、『『贈る』行為の両義性——『贈与論』再考: モースからジンメルそしてルーマンを経由して』(2018)を発表。村田賀依子「ハビトゥス・状況・行為——『ポテンシャルティ』に着目してブルデューを読む』(2017)、江頭大蔵「個人と社会の異質性とディシプリン変容」(2018)も発表された。最終年度の2018年度は、上記のとおり4年間の研究を総括しつつ、各メンバーが研究成果を報告書にまとめる作業に取り組んだ。

◇C班（国際比較チーム）

<2018年度の研究報告>

これまでの調査研究の成果を研究班メンバーそれぞれで報告書原稿等にまとめた。また、2月に開催された国際シンポジウムでの発表を行なった。

<4年間の研究報告>

本研究班は研究期間中に、それぞれ調査チームを組んで韓国、スペインにおいて聴き取りを含む現地調査を実施した。また国内でのインタビュー、外国文献などを通じて台湾、トルコという非ヨーロッパ語圏においてデュルケームをはじめとする古典的社会学がどのように受容されているかについて調査・研究を進めた。

スペイン調査においてはバルセロナの複数の大学で聴取りと意見交換を実施した。デュルケームに限らず古典的社会学は現在の基本的な文献として尊重されているが、教育とりわけ初学者向けの教育にあたっては古典を学ぶというよりも現代社会を考えるうえでどのように「使える」のかを中心に触れられることが多いとのことであった。

韓国調査においてはソウルの大学でデュルケーム理論を中心に研究する研究者の協力を得て聴取りと意見交換を実施した。デュルケームの理論は現代社会の問題を解明するツールになりうるとの所見を得た。

台湾については来日中の台湾人研究者の協力を得て聴取り調査を実施した。台湾ではアメリカに留学して帰国した研究者を中心に社会学の研究が始まったという事情もあり、どちらかといえば20世紀のアメリカ社会学がベースとなって今は台湾社会を対象とする研究が重視されているとのことであった。

トルコについては文献研究を通じてトルコの社会学教育においてデュルケミアン的な発想がどのように生かされたかを中心に検討を進めた。

◇D班（社会学教育チーム）

<2018年度の研究報告>

D班（社会学教育チーム）は、年3回（7月・9月・11月）の班別研究会を定期的に開催しながら、日本、フランス、英米、ドイツ等における社会学テキストやシラバス、また学術雑誌に掲載されたデュルケームに関わる論文の検討等を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程、社会学の理論の背景をなす社会学者の伝記的な側面についての記述のあり方などに着目しながら研究を進めてきた。また、本科研全体のプロジェクトである『デュルケーム命題集』（仮題）の刊行の準備についても、本班から編集のコアメンバーを出し、また班別研究会でも編集に関わる議論を行うことによって、これに積極的に協力した。国際シンポジウム開催に向けた準備の中心的な役割も担った。

<4年間の研究報告>

D班（社会学教育チーム）は、毎年およそ3～4回程度の班別研究会を定期的に行いながら、日本、フランス、英米、ドイツ等における社会学テキストやシラバス、また学術雑誌に掲載されたデュルケームに関わる論文の検討等を通じて、大学教育におけるデュルケーム社会学の位置づけや、デュルケーム社会学の「古典化」の過程、社会学の理論の背景をなす社会学者の伝記的な側面についての記述のあり方などに着目しながら研究を進めてきた。研究の成果は、学術論文、日本社会学会をはじめとする諸学会での報告、本科研全体研究会での報告、D班班別研究会などを通じて積極的に発表してきた。

4年間の研究を通じて、最終的に、以下のようないくつかの点を明らかにすることができた。まず、教科書というものはそもそも、通常は学問分野の主要な刊行物に含まれるとは見なされにくい、しかし、すべての学生が社会学に関して有すべき基礎的な知識と見なされるもの、同時代の普通の社会学者の間で当然の事柄と見なされるもの、どのような著作や著者が例示的あるいは重要なものであると扱われているか、といったことを示すものとしてとらえることができる。それゆえ、ディシプリンに関する考察を教科書に着目して行うことの正当性が主張される。次に、日本のいくつかの教科書の検討を通じて、没後百年を迎えたデュルケームの社会学が、「連帯」「自殺」などの具体的な概念とともに、他の学問とは異なるオリジナリティを問いながら継承されているということがあらためて確認された。また、フランスと日本との教科書の比較によって、これら両国におけるデュルケームの取り扱われ方には、それほど大きな違いはないことも明らかにされた。さらに、ドイツの社会学史と社会学理論の教科書の中では、デュルケームがフランスにおける社会学の制度的確立に寄与したこと、社会的事実に関する社会学の方法論的なカノンと、社会統合の問題という今日に至る問いを提起し、社会学理論の構成要素として分業の型を位置づけたこと、近代的な道徳学および道徳教育の基礎に社会学を据えたこと、などが示されていた。こうした視点も、日仏の教科書と通じるものである。さらに、社会学の理論・学説をその内容のみならず、それを主張した人の伝記的背景と結びつけて学ぶ／教えることは、「その理論・学説はどのような内容か」を理解することに加えて、「なぜその理論・学説があるのか」という理論・学説の存在に関する理解を深める行為と考えられる。理論・学説そのものの理解に加えて、こうした伝記的背景にも考慮することは、社会学理論・学説の教授法の有効な手がかりのひとつになると考えられる。また、学術雑誌でのデュルケームの扱われ方の検討を通じて、デュルケーム社会学の「古典化」のプロセスの一端についても明らかにすることができた。

2019年2月・3月に、フランスより社会科学高等研究院（EHESS）教授シジル・ルミュー氏を招き、本科研主催の国際シンポジウムとラウンド・テーブルを開催しました。シジル・ルミュー氏の紹介と、シンポジウムのプログラムなどを掲載します。

●シジル・ルミュー氏の紹介

シジル・ルミュー氏は社会学者で、社会科学高等研究院（EHESS-パリ）の教授であり、「反省性に関する学際研究室：ヤン・トマ文庫」（Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT)）の所長をつとめている。研究の第一の側面は、メディアと公共空間の社会学を対象としたものである。この分野において氏はとりわけ、『悪い報道』（*Mauvaise presse* (2000)）、『耐スキャンダル性』（D・ド・ブリックとの共著）*A l'épreuve du scandale* (avec D. de Blic, 2005)、『ジャーナリスト的主観性』*La subjectivité journalistique* (2010)を刊行している。研究の第二の側面は、社会学理論に関わるものである。この分野において氏は、プラグマティズムの伝統に関心を寄せ（『プラグマティック社会学』（*La sociologie pragmatique*, 2018)）、これをデュルケーム主義との対話の中に引き入れようと試みている（『義務と恩寵』（*Le Devoir et la grâce*, 2009)）。氏はまた、社会学と政治との関係（『社会主義と社会学』B・カルサンティとの共著（*Socialisme et sociologie*, avec B. Karsenti, 2017)）や、社会科学の歴史（『社会科学のために』編著（*Pour les sciences sociales*, dir., 2017)）、その方法論（『社会科学を行う——批判する』P・アークとの共著（*Faire des sciences sociales : critiquer*, avec P. Haag, 2012)）、さらに一般読者に対するその普及（『現場の社会学』（*La sociologie sur le vif*, 2010)）にも関心を寄せている。



Cyril Lemieux est sociologue, directeur d'études à l'Ecole des hautes études en sciences sociales (EHESS - Paris) et directeur du Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT). Un premier volet de ses recherches est consacré à la sociologie des médias et de l'espace public. Dans ce domaine, il a notamment publié *Mauvaise presse* (2000), *A l'épreuve du scandale* (avec D. de Blic, 2005) et *La subjectivité journalistique* (2010). Un second volet de son travail concerne la théorie sociologique. Dans ce domaine, il s'est intéressé à la tradition pragmatique (*La sociologie pragmatique*, 2018) en essayant de la faire entrer en dialogue avec le durkheimisme (*Le Devoir et la grâce*, 2009). Il s'intéresse également aux rapports entre sociologie et politique (*Socialisme et sociologie*, avec B. Karsenti, 2017) ainsi qu'à l'histoire des sciences sociales (*Pour les sciences sociales*, dir., 2017), à leur méthodologie (*Faire des sciences sociales : critiquer*, avec P. Haag, 2012) et à leur vulgarisation auprès du grand public (*La sociologie sur le vif*, 2010).

●東京会場

メディアと公共空間：メディアは誰のものか
Medias et espace public : à qui appartiennent les medias ?

誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

主催：科学研究費補助金・基盤研究 (B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」(15H03409)
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケム/デュルケム学派研究会
共催：日仏会館・フランス国立日本研究所

*日 時：2019年2月27日(水) 13:30~18:00

*場 所：日仏会館 1階ホール Maison franco-japonaise, Auditorium

*参加者数：66名

*プログラム

13:30 - 13:40 1. 趣旨説明 Présentation du colloque

13:40 - 15:40 2. 講演 conférence

Cyril LEMIEUX (LIER-FYT / EHESS-Paris) シリル・ルミュー

Chasse aux fake news: une panique morale?

フェイクニュース狩り：道徳的パニック？

15:40 - 15:50 休憩 Pause

15:50 - 16:50 3. 報告 Intervention

藤吉圭二 (追手門学院大学) FUJIYOSHI Keiji (Otemon Gakuin University)

「誰もが情報発信できる時代」に発信されないもの

What remains unshared in the age when anyone can be source of information

金瑛 (関西大学) KIN Ei (Kansai University)

「ポスト真実」の時代における「記憶」と「記録」の関係

Relations entre « mémoire » et « enregistrement » à l'âge de « post-vérité »

16:50 - 17:10 4. コメント Discussion :シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX

17:10 - 18:00 5. 全体討論 Discussion générale



●奈良会場

デュルケームとタルド：その現代的意義

Durkheim et Tarde : leurs significations actuelles

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケームとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）

日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケーム/デュルケーム学派研究会

共催：奈良女子大学社会学研究会

*日 時：2019年3月4日（月）13:30～18:00

*場 所：奈良女子大学 生環系E棟 108教室

*参加者数：23名

*プログラム

13:30 - 13:40 1. 趣旨説明 Présentation du colloque

13:40 - 15:40 2. 講演 conférence

Cyril LEMIEUX (LIER-FYT / EHESS-Paris) シリル・ルミュー

La conception durkheimienne du normal et du pathologique et ses conséquences politiques

正常と病理のデュルケーム的概念とその政治的帰結

15:40 - 15:50 休憩 Pause

15:50 - 16:50 3. 報告 Intervention

赤羽悠（早稲田大学 / LIER-FYT）AKABA Yu (Université de Waseda / LIER-FYT)

神話としての民主主義：デュルケームにおける政治と人類学

La démocratie en tant que mythe : la politique et l'anthropologie chez Durkheim

笠木丈（社会科学高等研究院 EHESS 博士課程）KASAGI Jo (doctorant à l' EHESS)

ガブリエル・タルドと社会的無意識

Gabriel Tarde et l'inconscient social

16:50 - 17:10 4. コメント Discussion :シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX

17:10 - 18:00 5. 全体討論 Discussion générale

ラウンド・テーブル「シリル・ルミュー氏を囲んで」

主催：科学研究費補助金・基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」（15H03409）

日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、デュルケーム/デュルケーム学派研究会

共催：奈良女子大学社会学研究会

*日 時：2019年3月5日（火）10:00～13:00

*場 所：奈良女子大学 文学系N棟 339教室

*参加者数：12名

*話題提供：シリル・ルミュー「フランスにおける社会学の展開」L'évolution sociologique en France

フランス社会学の動向をテーマに、情報交換をおこなった。

* 国際シンポジウム ちらし (表)

日時: 2019年2月27日(水)
13:30~18:00

場所: 日仏会館 1階ホール

※事前申込必要/詳しくは裏面をご覧ください

誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

メディアと 公共空間 メディアは 誰のものか

Medias et espace public : à qui appartiennent les medias ?

主催: 科学研究費補助金・基盤研究(B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」(15H03409)
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケム/デュルケム学派研究会
共催: 日仏会館・フランス国立日本研究所



デュルケムと タルド その現代的意義

Durkheim et Tarde : leurs significations actuelles

日時: 2019年3月4日(月)
13:30~18:00

場所: 奈良女子大学
生環系E棟108教室

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケムとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

※ 3月5日(火) ラウンドテーブルも開催

主催: 科学研究費補助金・基盤研究(B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」(15H03409)
日本学術振興会「学術研究動向等に関する調査研究」、日仏社会学会、デュルケム/デュルケム学派研究会
共催: 奈良女子大学社会学研究会



* 国際シンポジウム ちらし (裏)

国際シンポジウム Colloque international

2月27日
(水)

参加無料
要オンライン
申込
Inscription

メディアと公共空間：メディアは誰のものか


Medias et espace public : à qui appartiennent les medias ?

13:30~18:00 日仏会館 1階ホール Maison franco-japonaise, Auditorium

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25
JR山手線：恵比寿駅東口徒歩10分 東京メトロ日比谷線：恵比寿駅1番出口徒歩12分

言語：日本語・フランス語・英語（講演については逐次通訳あり）

日仏会館・フランス国立日本研究所Web siteより参加申込みをお願いします
https://www.mfj.gr.jp/index_ja.php



誰もが情報発信できると同時に、事実に基づかない言説が流布している現代社会を、「フェイクニュース」「ポスト真実」「国家権力」「記憶・記録」等をキーワードに問い直す。

1. 趣旨説明 présentation du colloque (13:30~13:40)
2. 講演 conférence (13:40~15:40)


シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX (社会科学高等研究院EHESS)
フェイクニュース狩り：道徳的パニック？
Chasse aux fake news: une panique morale?

(休憩 15:40~15:50)
3. 報告 interventions (15:50~16:50)

藤吉圭二 FUJIYOSHI Keiji (追手門学院大学)
「誰もが情報発信できる時代」に発信されないもの
What remains unshared in the age when anyone can be source of information

金瑛 KIN Ei (関西大学)
「ポスト真実」の時代における「記憶」と「記録」の関係
Relations entre « mémoire » et « enregistrement » à l'âge de « post-vérité »
4. コメント discussion (16:50~17:10) シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX
5. 全体討論 discussion générale (17:10~18:00)

参加申し込みはこちら→
または「メディアと公共空間：メディアは誰のものか」で検索



シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX

フランスの社会学者で、EHESS(社会科学高等研究院)教授。Laboratoire interdisciplinaire d'études sur les réflexivités - Fonds Yan Thomas (LIER-FYT)(反省性に関する学際研究室:ヤントマ文庫)の所長でもある。研究テーマはメディアと公共空間の社会学および社会学理論。主な著作は以下の通り。

<単著>

Mauvaise presse (『悪い報道』) 2000年
Le Devoir et la grâce (『義務と恩寵』) 2009年
La subjectivité journalistique (『ジャーナリストの主観性』) 2010年
La sociologie sur le vif (『現場の社会学』) 2010年
La sociologie pragmatique (『プラグマティック社会学』) 2018年

<編著>

Pour les sciences sociales (『社会科学のために』) 2017年

<共著>

A l'épreuve du scandale (『耐スクandal性』), (D. de Blic との共著) 2005年
Faire des sciences sociales : critiquer (『社会科学を行うー批判する』), (P. Haag との共著) 2012年
Socialisme et sociologie (『社会主義と社会学』), (B. Karsenti との共著) 2017年

国際シンポジウム Colloque international

3月4日
(月)

参加無料
申込不要

デュルケームとタルド

: その現代的意義

Durkheim et Tarde :
leurs significations actuelles

13:30~18:00 奈良女子大学 生環系E棟108教室

〒630-8506 奈良市北魚屋西町

言語：日本語・フランス語（講演については逐次通訳あり）

フランス社会学の草創期のライバル、デュルケームとタルドを読み直し、その現代的意義を問う。

1. 趣旨説明 présentation du colloque (13:30~13:40)
2. 講演 conférence (13:40~15:40)

シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX (社会科学高等研究院EHESS)
正常と病理のデュルケームの概念とその政治的帰結
La conception durkheimienne du normal et du pathologique et ses conséquences politiques

(休憩 15:40~15:50)
3. 報告 interventions (15:50~16:50)

赤羽悠 AKABA Yu (早稲田大学)
神話としての民主主義：デュルケームにおける政治と人類学
La démocratie en tant que mythe : la politique et l'anthropologie chez Durkheim

笠木丈 KASAGI Jo (社会科学高等研究院EHESS博士課程)
ガブリエル・タルドと社会的無意識
Gabriel Tarde et l'inconscient social
4. コメント discussion (16:50~17:10) シリル・ルミュー Cyril LEMIEUX
5. 全体討論 discussion générale (17:10~18:00)

参加無料
申込不要

3月5日
(火)

ラウンドテーブル：シリル・ルミュー氏を囲んで


Table ronde : autour de M. Cyril LEMIEUX

10:00~13:00 奈良女子大学
文学系N棟339教室

言語：日本語・フランス語（逐次通訳あり）

話題提供：シリル・ルミュー「フランスにおける社会学の展開」L'évolution sociologique en France
フランス社会学の動向をテーマに、情報交換をおこないます。

奈良女子大学キャンパスマップはこちら→
または「奈良女子大学キャンパスマップ」で検索



連絡先(全会場):デュルケーム科研推進事務局 durkheim2017@gmail.com

2018 D班（社会学教育チーム）2018年度第2回班別研究会

日時：2018年7月7日（土）13:00～18:00

場所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟4階・C462共同談話室（神戸市）

出席者：5名

内容：小川 伸彦「言説としての古典化と事実としての古典化(1)——AJSのなかのデュルケム」
梅村 麦生「ディシプリン確立の制度的手段としての専門誌——『ケルン社会学・社会心理学雑誌』を例に」
横山寿世理「続・社会学教科書におけるデュルケム社会学の伝えられ方」
川本 彩花「最終報告に向けて」
白鳥 義彦「フランス社会学初期の社会学教科書」

2018 D班（社会学教育チーム）2018年度第3回班別研究会

日時：2018年9月9日（日）13:30～20:00

場所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟4階・C462共同談話室（神戸市）

出席者：6名

内容：横山寿世理「日本の社会学教科書・参考書に掲載されたデュルケムの社会学概念の傾向」
川本 彩花「理論・学説に関する学術雑誌論文と「伝記」の記述——最終報告書論文「(仮題)社会学史の物語化：日本の社会学教科書の分析」にむけて」
白鳥 義彦「英仏の比較から見る社会学教科書」
梅村 麦生「専門誌にみる古典家の再発見と理論的立場の確立——『ケルン社会学・社会心理学雑誌』を例に(2)」
小川 伸彦「言説としての古典化と事実としての古典化(2)——AJS1898～1937におけるデュルケムの位置づけの変遷：デュルケムはいつ「古典」になったのか」
山田 陽子「『デュルケムの論点』構成案について」

2018 D班（社会学教育チーム）2018年度第4回班別研究会

日時：2018年11月11日（日）14:00～19:00

場所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟4階・C462共同談話室（神戸市）

出席者：7名

内容：白鳥 義彦「社会学教科書の社会学」とデュルケム
横山寿世理「日本の社会学教科書・参考書で扱われるデュルケムの社会学概念の変遷」
梅村 麦生「社会学のディシプリンと「古典家」としてのデュルケム——ドイツの社会学教育におけるデュルケム」
川本 彩花「最終報告書論文「(仮題)社会学史の物語化——日本の社会学教科書の分析」の草稿の報告」
小川 伸彦「「古典化」されるデュルケム——創刊から1945年のAJSにおける位置づけの変遷を中心に」
山田 陽子「『デュルケムの論点』の出版企画について」

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。

周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※ 訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.22●

事物が複雑であり理解するのに困難なものであることを人間に教えたのは科学であって、宗教ではない。

<< C'est la science, et non la religion, qui a appris aux hommes que les choses sont complexes et malaisées à comprendre. >>

科学が、したがって社会学が区別されるとすれば、それは後者がこの社会の複雑性、不透明性を認識しているからにほかならない。だとすれば、社会学が提示しているのは、何よりもまずその不透明さに向き合う態度であることになる。社会学とは、ひとたび社会の真理を一点の曇りもなく明らかにすれば完了するといったような類のものではない。それは、必然的に社会を生きるわれわれがその得体の知れないものは何なのかと問い続ける、その営みそのもののなかに、つねに現在進行形で存在するようなものなのである。

(赤羽悠 記)

【キーワード】

科学、物（モノ）、社会の複雑性

【出典】 *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1895(Presses universitaires de France 版 p. 37)

(邦訳)『宗教生活の基本形態』(上)ちくま学芸文庫、山崎亮訳、2014年、62頁

●ことばんごう no.23●

いずれのタイプの自殺者も、いわゆる

アンフィニ
無限という病によって苛まれている。

(…) 前者 [エゴイズム] は、果てしもない夢想のなかに迷いこみ、後者 [アノミー] は、果てしもない欲望のなかに迷いこむ。

[] 内は引用者による

<< Les suicidés de l'un et l'autre type souffrent de ce qu'on a appelé le mal de l'infini. [...] Le premier se perd dans l'infini du rêve, le second, dans l'infini du désir. >>

に登場するラファエルを参照して「エゴイズムの自殺」を論じ、シャトーブリアンの小説に登場するルネを参照して「アノミー的自殺」を考察している。それを通じて、デュルケームは、エゴイズムは「果てしもない夢想」のなかに迷いこむ思惟の病であり、アノミーは「果てしもない欲望」のなかに迷いこむ感性の病であると分析した。このように、文学をデータに活用して分析するとき、デュルケームは、対象を内側から把握し、そうすることで、社会学的思考を深さの次元へ導いているように思われる。

(岡崎宏樹 記)

【キーワード】

エゴイズム、アノミー、文学

【出典】 *Le suicide: étude de sociologique*, [1897]1997 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.324)

(邦訳)『自殺論』中公文庫、宮島喬訳 [改版]、2018年、482頁

【ミニ解説】

『自殺論』は、統計を基礎データに用いて、自殺の社会的原因を分析した古典として知られる。けれども、この本はたんに社会病理に対する知的関心から書かれたものではないだろう。乾いた冷静な分析のむこうに、人間の苦悩を真摯にみつめるデュルケームの情熱が感じられるのである。方法論という観点からみて興味深いのは、実証的研究の模範のように扱われる『自殺論』が、統計だけではなく、文学をデータとして活用していることである。エゴイズムとアノミーはいずれも「無限という病」だが、その違いは、対象を外側から考察するだけでは把握できない。「種々の自殺タイプの個人的形態」の章で、デュルケームは、ラマルティエヌの小説

●ことばんごう no.24●

科学は、客観的であるがゆえに本質的に非人格的なものであり、集团的作業によってしか進歩しえないものだ。

<< Cependant la science, parce qu'elle est objective, est chose essentiellement impersonnelle et ne peut progresser que grâce à un travail collectif. >>

そうとうに異なった立場をとっているともいえる。デュルケム自身、シミアンへの手紙のなかで、「私は、私たちのあいだに均質性が確立されるのを期待していませんでしたし、『年報』を、参加資格は科学的誠実性だけで十分なような論集にしようとしただけでした」と述べていた。学派とはいえ、均質性を誇張してはならない。

われわれの科研研究もまた、同じ精神によって導かれていたのであった――。

(中島道男 記)

【キーワード】

デュルケム学派、社会学年報、科学観

【出典】 Préface à *L'Année sociologique*, 1896-1897, vol. I, dans Durkheim, E., *Journal sociologique*, 1969(Presses universitaires de France p. 36)

【参考】 中島道男『エミール・デュルケム——社会の道徳的再建と社会学』東信堂、2001年、16-17頁、117-120頁

【ミニ解説】

デュルケム学派誕生を後押しした科学観がこれである。『社会学年報』創刊号の「序文」で述べられている。ここには、各学説が学者の個性とあまりにも密接につながっていた社会学の現状への批判があった。

とはいえ、デュルケムのほか、ブーグレ、フォコネ、アルヴァックス、ユベール、モース、シミアンなど、綺羅星のごとき大物たちの集まりが一枚岩なわけがない。甥のモースでさえ、叔父とは

2018 年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●論文・図書

- * 岡崎宏樹、2018、「相互作用と自己——〈自分らしく生きる〉とはどういうことか」奥村隆編『はじまりの社会学：問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 19-35
- * 岡崎宏樹、2018、「非合理性と流動性——社会学の境界で考える」『日仏社会学会年報』29: 49-58
- * 小川伸彦、2018、「都市とコミュニティ——都市研究には社会学のどんな姿が映しだされているか」奥村隆編『はじまりの社会学：問い続けるためのレッスン』ミネルヴァ書房: 165-182
- * 菊谷和宏、2018、『社会学的方法の規準』講談社（講談社学術文庫）
- * 溝口大助、2018、「沸騰、贖罪、死——デュルケム学派宗教社会学における『聖なるもの』」『Núξ = ニュクス』5: 110-135

●国内学会・研究会

- * 笠木丈「タルドにおけるクールノーの受容について」（日仏哲学会 2019 年春季研究大会口頭発表、2019.3.23 於大阪大学）
- * 中倉智徳「社会運動の「モナド論的分析」の可能性について——Isaac Marrello-Guillamón による議論を中心として」（日本社会学会第 91 回大会口頭発表、2018.9.15 於甲南大学）

●国際学会

- * Ozeki, Ayako, "The concept of personality in Durkheim: Generality, commonness, abstractness, and universality", XIX ISA World Congress of Sociology, 2018.7.21, Metro Toronto Convention Center
- * Nakakura, Tomonori, "Reception of Durkheim's theory in East Asia and Post-Western Sociology / Compressed Modernity", The Inaugural Congress of East Asian Sociological Association, 2019.3.9, Chuo University

●2017 年度以前の成果報告（未掲載分）

- * 中倉智徳、2017、「微小な痕跡に残る社会——ガブリエル・タルドと筆跡の社会学」渡辺公三・石田智恵・冨田敬大編『異貌の同世代——人類・学・の外へ』平凡社: 49-71

（2019 年 3 月 28 日事務局把握分）

成果報告書 目次

デュルケム社会学の成立と受容——ディシプリンとしての社会学を考えるために

第1篇：デュルケム社会学の成立と展開

第1部：デュルケム社会学の成立と社会学の制度化

- | | | |
|-----|--|--------------|
| 第1章 | デュルケム社会学とエピステモロジー
——デュルケム社会学のディシプリンを支える「科学性」の問題 | 【A班】
太田健児 |
| 第2章 | フイエとギュイヨ——デュルケムの先駆者たち | 北垣徹 |
| 第3章 | 永遠の真理と変化する実在——デュルケムとベルクソンにおける言語的観念の役割 | 小関彩子 |
| 第4章 | 犯罪の正常性をめぐるデュルケムとタルドの論争 | 池田祥英 |
| 第5章 | 社会学という実践——デュルケムにおける社会の客観性をめぐって | 赤羽悠 |

第2部：デュルケム社会学理論のインパクト

- | | | |
|------|--|--------------|
| 第6章 | デュルケム社会学の21世紀——モース『贈与論』と現代社会学の出会い | 【B班】
三上剛史 |
| 第7章 | 社会学の固有性について——経済社会学・MAUSSの歩みとそこからの展開 | 古市太郎 |
| 第8章 | 個人と社会の異質性とディシプリンの変容 | 江頭大蔵 |
| 第9章 | デュルケム学派と心理学——デュルケムとアルヴァックスを中心に | 金瑛 |
| 第10章 | デュルケムとベルクソン——社会の内在性と超越性をめぐって | 笠木文 |
| 第11章 | 聖なるもの、沸騰、事物——デュルケム宗教論再考 | 溝口大助 |
| 第12章 | 体験理解の方法論的探求——デュルケムからバタイユへ | 岡崎宏樹 |
| 第13章 | パーソンズのデュルケム解釈——パーソンズの主意主義的行為理論をめぐって | 杉谷武信 |
| 第14章 | デュルケムの宗教論からブルデューの国家論へ——「社会とは神である」をめぐって | 村田賀依子 |
| 第15章 | 100年後のデュルケム——パウマンの批判に答えて | 中島道男 |

第2篇：受容されるデュルケム社会学とそのゆらぎ

第3部：デュルケム社会学の国際的受容

- | | | |
|------|--|------------------------------|
| 第16章 | 東アジアでのデュルケム受容と「圧縮された近代」 | 【C班】
中倉智徳 |
| 第17章 | 韓国調査報告——キム・ミョンヒ氏インタビューより | 林大造 |
| 第18章 | バルセロナ三大学調査について | 川本彩花
吉本惣一
藤吉圭二
横井敏秀 |
| 第19章 | トルコの大学における社会学教育の制度化とデュルケム主義
——ズィヤ・ギョカルプ (Ziya Gökalp) の活動を中心に | |

第4部：社会学教育のなかのデュルケム

- | | | |
|------|--|--------------|
| 第20章 | 「古典化」されるデュルケム——1930年代までのアメリカの社会学誌を中心に | 【D班】
小川伸彦 |
| 第21章 | 日本の社会学教科書の中で生きるデュルケム
——デュルケム社会学のパーспекティブと概念をめぐって | 横山寿世理 |
| 第22章 | 『デュルケムの論点』刊行に寄せて——E.デュルケム没後100周年記念に | 山田陽子 |
| 第23章 | 社会学理論・学説の記述における伝記的背景——日本の社会学教科書の分析 | 川本彩花 |
| 第24章 | ドイツの社会学教科書とシラバスに見るデュルケム
——社会学の方法論と主題設定に関して | 梅村麦生 |
| 第25章 | 「社会学教科書の社会学」とデュルケム | 白鳥義彦 |

■ ■ 2018年

- 7月5日(木) 部内報第38号配信
- 7月7日(土) 社会学教育班2018年度第2回班別研究会(神戸市)参加者5名
- 7月15日(日) ニュースレター第8号発行
- 8月2日(木) 部内報第39号配信
- 9月6日(木) 部内報第40号配信
- 9月9日(日) 社会学教育班2018年度第3回班別研究会(神戸市)参加者6名
- 10月4日(木) 部内報第41号配信
- 11月1日(木) 部内報第42号配信
- 11月11日(日) 社会学教育班2018年度第4回班別研究会(神戸市)参加者7名
- 12月6日(木) 部内報第43号配信

■ ■ 2019年

- 1月10日(木) 部内報第44号配信
- 2月7日(木) 部内報第45号配信
- 2月27日(水) 国際シンポジウム「メディアと公共空間：メディアは誰のものか」(東京都渋谷区)参加者66名
- 3月4日(月) 国際シンポジウム「デュルケームとタルド：その現代的意義」(奈良市)参加者23名
- 3月5日(火) ラウンド・テーブル「シリル・ルミュー氏を囲んで」(奈良市)参加者12名
- 3月7日(木) 部内報第46号配信
- 3月31日(日) ニュースレター第9号発行

編集後記

本科研のニュースレター「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」も最終号となりました。今号では、4年間の研究報告や本科研主催の国際シンポジウムの報告を掲載しています。

これまでお読みいただいた皆様、誠にありがとうございました。

科学研究費補助金基盤研究(B)

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第9号

発行日：2019年3月31日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部

中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com

HP: <http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/>